

マタイ 6:10bc の編集史的研究

— マタイの『天の王国』理解の考察 —

木原桂二

1. 研究の目的と方法

1.1. 研究の動機

マルコ福音書において「神の王国 (ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ)」は、イエスの宣教内容を示す重要な概念として現れる (1:15; 4:11, 26, 30; 9:1, 47; 10:14-15, 23-25; 12:34; 14:25; 15:43)。一方、マタイ福音書においては多くの箇所ですべて「神の国」が「天の王国 (ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν)」に置き換えられており、その使用回数も増えている。マタイに現れる「神の王国」「天の王国」「王国 (ἡ βασιλεία)」などの概念を合計すれば、マルコの約三倍にも及んでいる。

それゆえ「(神の/天の) 王国」は、マタイの宣教理解を考察する上で注目すべき概念であると言ってよい。本論文においては、この観点を踏まえた上でマタイ福音書全体における「天の王国」概念の特徴を明らかにする。ただし研究対象が広範囲に及ぶため、マタイの編集意図が極めて明瞭な箇所を取り上げて積義することにした。

まず、その準備作業として、王国関連のキーワードに関するマタイの使用箇所と編集意図を概観できる《資料》を作成したので参照されたい(本論文末尾に配置)。この《資料》では、マルコ福音書における王国関連の言葉を採用したマタイの編集に加え、Q 資料と特殊資料に施された編集内容を確認できるようにしている。

この《資料》を見れば、ただ単にマタイが王国関連のキーワードを多用しているだけでなく、ある意図をもって元資料の文言を修正し、自らの福音書を編み上げていることが推察できるはずである。それゆえ本来であれば、この《資料》によって提示されたすべての箇所の積義を行い、相互の箇所の関連性を考察した上でマタイにおける王国概念の全体像を明らかにしなければならない。しかし、その作業は膨大なものになるため、とりあえずは小さな単位から始める必要がある。

そこで、本論文においてはマタイ 6:10bc を最初の考察対象にしたい。この箇所には、マタイの付加と見られる王国関連の文言が確認できるからである。ただし、この箇所に「天の王国」というマタイ特有の表現が用いられているわけではない。研究手順として、「天の王国」という表現が直接用いられている箇所から取り扱うのが相

応しいという考えもあろう。しかし、この箇所における 6:10a の「あなたの王国 (ἡ βασιλεία σου)」が「神の王国」を示唆することは自明であり、また 6:9b においては父(神)の存在場所が「天」であるとされている。それゆえ 6:10bc を「天の王国」関連の箇所とするのは妥当であると判断して考察を行いたい。

1.2. 研究史

マタイにおける「天の王国」概念の考察に際して、「神の王国」との意味上の相違があるかどうか重要なポイントになる。これに関する研究史を概観すると、キリスト教発生以前のユダヤ教諸文献において「天の王国」が使用された形跡はないとの結論が得られる。旧約と新約の中間時代におけるユダヤ教文献は「天の王国」を使用していないため、それがイエス時代に普及したとは考えにくいからである¹。

一方「神の王国」の用法になると、古代ユダヤ教文献での用例は少ないものの、旧約外典・偽典、タルゲーム、フィロの著作、カディーシュや他の祈願文、死海文書にも見られる²。それゆえ、イエスがこの表現を用いたとする想定には無理がない³。

そこで次のような想定が可能となる。当時、史的イエスは広く流布していた（しかし使用頻度はそれほど多くはなかった）「神の王国」という表現を、自らの福音宣教の目的に合わせて利用した。それがイエスの死後、約数十年の時を経て福音書が編集される過程で、マタイの場合においては同時代のラビ文献等において一般的であった「天の王国」という表現に置き換えられた。この推測通りであるとすれば、マタイは「天の王国」に特別な神学的動機を込めていなかったということになる⁴。

1.3. 問題設定と研究方法

以上の研究史の概観から、マタイにおける「天の王国」の使用意図に関する概ねの合意が得られているように思われる。しかしわれわれは、この捉え方に満足することはできない。確かに、通時的に見れば「天の王国」は「神の王国」の単純な言い換え

1 J. エレミアス『イエスの宣教 新約聖書神学 I』（角田信三郎訳）新教出版社、1978 年、188 頁参照。

2 同上、63 頁参照。

3 J. シュニーヴィント『マタイによる福音書 翻訳と注解（NTD 新約聖書注解別巻）』（量義治訳）ATD・NTD 聖書注解刊行会、1980 年、46-47 頁は、この点について反対の見解を示している〔cf. D. A. Hagner, *Matthew 1-13* (WBC 33a), Dallas, Tex.: Word Books, 1993, pp. 47f.〕。同書は、イエスの時代に畏怖の念から神名を避け、代わりに天という語を用いる習慣があったとし、ルカ 15:18, 21 をその主要参考箇所としている。しかし畏怖の念がある割には、マタイの 4 か所で「神の王国」が用いられているのは不可解であるし、ルカ 15:18, 21 の指摘についても、それをイエス時代の習慣であったとするには根拠が薄弱であると思われる。

4 U. ルツ『マタイによる福音書 EKK 新約聖書注解 I/1』（小河陽訳）教文館、1990 年、201 頁は、「マタイ神学からは τοῦ θεοῦ (神の) を τῶν οὐρανῶν (天の) に変えた理由は認められない」（傍点筆者）としている。

であると見なされよう。マタイが、これら二つの概念を同義として用いたことについて異論を打ち立てる必要はないと考えられる。

しかし「神の王国」と「天の王国」が入れ替え可能な概念であるとしても、両者には表現上の相違があるのだから、この点を無視することはできない。「神」は信仰の対象であり、「天」は信仰の対象である神の存在場所である。この違いを考慮すれば、「神の王国」と「天の王国」に使い分けがなされた可能性を想定することができる。

たとえば「天と地のつながり」を明確に打ち出すマタイ独自のエピソードがある(16:19; 18:18-19; 28:18)。これらの箇所から、マタイが「天(の王国)」の対概念である「地」との関係を意識していることが窺える。「神の王国」と「天の王国」が同義であるとしても、「天」を「神」に置き換えてしまったら「天と地のつながり」を表現することはできなくなってしまう。つまり、マタイには「天の王国」という表現を使う必然性があったと推察できるわけである。

それゆえ、こうした表現上の差異に込められた編集意図を考察する必要があると考えたい。その上で、本論文においては、マタイ福音書における「天と地のつながり」を示す 6:10bc の編集意図に関する考察を行う。

研究方法としては、6:10bc を含む通称「主の祈り」のテキストの資料分析を行うことにより、当該箇所がマタイの挿入句であるかどうかを確認する。その上で、この句の伝承史的背景について分析を行う。具体的には、旧約聖書において同様のモチーフが用いられているかどうか(伝承史的視点)、用いられているとすれば、それがマタイ福音書の中でどのような文学的機能を果たしているか(共時的視点)を検討する。ただし考察結果が、マタイの「天の王国」概念を探究する上で導入としての位置づけになることについては、すでに述べた通りである。

2. マタイ 6:10bc の編集意図に関する考察

2.1. マタイ 6:10bc と Q 資料の関係

マタイ 6:10bc は、通称「主の祈り」の第三祈願と呼び表されている。しかしこの第三祈願はルカ版の「主の祈り」(11:2b-4)には存在しないため、さしあたってはマタイが付加した文言であるのか、あるいはルカが削除したかどうかの問題となる。マタイとルカは共通の資料である Q を基に「主の祈り」全体を構成していると見て間違いないが、それぞれの編集作業によって、両テキストには相違が生じている。以下に、その比較を確認できるよう両テキストを並置したので参照されたい。

マタイ 6:9b-13		ルカ 11:2c-4	
9bc	Πάτερ ἡμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς· ἁγιασθήτω τὸ ὄνομά σου· 天におられる我らの父よ、あなたの名が聖とされますように。	2c	Πάτερ, ἁγιασθήτω τὸ ὄνομά σου· 父よ、あなたの名が聖とされますように。
10a	ἐλθέτω ἡ βασιλεία σου·	2d	ἐλθέτω ἡ βασιλεία σου·
10bc	γενηθήτω τὸ θέλημά σου, ὡς ἐν οὐρανῷ καὶ ἐπὶ γῆς· 天におけるように、地においても、あなたの意思が成りますように。		
11	τὸν ἄρτον ἡμῶν τὸν ἐπιούσιον δὸς ἡμῖν σήμερον·	3	τὸν ἄρτον ἡμῶν τὸν ἐπιούσιον δίδου ἡμῖν τὸ καθ' ἡμέραν·
12	καὶ ἄφες ἡμῖν τὰ ὀφειλήματα ἡμῶν, ὡς καὶ ἡμεῖς ἀφήκαμεν τοῖς ὀφειλέταις ἡμῶν·	4a	καὶ ἄφες ἡμῖν τὰς ἀμαρτίας ἡμῶν, καὶ γὰρ αὐτοὶ ἀφίομεν παντὶ ὀφείλοντι ἡμῖν·
13	καὶ μὴ εἰσενέγκῃς ἡμᾶς εἰς πειρασμόν, ἀλλὰ ῥῦσαι ἡμᾶς ἀπὸ τοῦ πονηροῦ.	4b	καὶ μὴ εἰσενέγκῃς ἡμᾶς εἰς πειρασμόν.

同一の資料に編集の手が加えられたと想定される場合、どちらが元来のものに近いかを判断する基準の一つにテキストの短さがある。ある箇所を削除すべき明確な意図が認められる場合を除いて、削除よりも付加される可能性のほうが高いと判断される。つまり、短い方がオリジナルのテキストに近いと見なされるわけである。

その点、「主の祈り」の場合はルカの方が短く、具体的には下線部の文言がマタイ版にのみ存在することになる⁵。この判断基準によればマタイ 6:10bc は付加であると見なされるが、それを補完する他の根拠があれば、その可能性は増し加わる。E. シュヴァイツァーは、6:10b 冒頭の句 (γενηθήτω τὸ θέλημά σου) がゲッセマネの祈り (マタイ 26:42) の文言と等しいため、この箇所がマルコの物語に対する付加であることに着目した上で、マタイの教会 (教団)⁶ によって祈りが拡大されたと想定している⁷。

5 他の文言については、マタイ版がオリジナルと見なされる箇所もあるが、われわれの課題とする必要はないので、ここでは考慮から除外する。これについては、J. S. クロップンボルグ他『Q資料・トマス福音書 本文と解説』(新免貢訳) 日本基督教団出版局、1996年、78頁; G. シュトレッカー『山上の説教』(佐々木勝彦/庄司真訳) ヨルダン社、1988年、209頁を参照されたい。

6 マタイが福音書によって提唱した神学思想 (信仰) を共有する共同体が想定されていると思われるが、歴史的にその姿が自明ではない集団を指して「教会」や「教団」と称することには賛同できない。現代の「教会」や「教団」のイメージがつかまとうからである。それゆえ「マタイの信仰共同体」と表現することを提唱したい。

7 E. シュヴァイツァー『山上の説教』(青野太潮/片山寛訳) 教文館、1989年、128-129頁参照。H. ヴェーダー『山上の説教 その歴史的意味と今日的解釈』(嶺重淑/A. ルスターホルツ訳) 日本キリスト教団出版局、2007年、216頁; シュトレッカー、前掲書、209頁も同様の見解を示している。D. J. Harrington (*The Gospel of Matthew*, Collegeville, Minn.: Liturgical Press, 1991, p. 95) は、マタイの教会や教団という語を使うことなく、単純にマタイの付加 (Matthew's additional) としている。一方でシュトレッカーは、主の祈りの「原本の主要な拡張はすでにマタイ以前の時代に行われていた」とし、マタイの編集的関与を全く認めていない。ところがシュトレッカーは、第三祈願は「マタイ神学と緊密な親和性をもっている」(220頁) と指摘している。もしも第三祈願がマタイの編集的関与の結果でないとするならば、この「緊密な親和性」は偶然ということになるのだろうか。

さらに「天におけるように地の上にも (ὡς ἐν οὐρανῷ καὶ ἐπὶ γῆς)」(6:10c) を、マタイの編集意図の結果であると想定できるだろうか。この点に関して、小河陽の見解が重要であると思われるので引用したい。「天と地は区別されながら呼応関係を持っている。地上で解きつなぐことは天上でも解きつなされる(16:19; 18:18)。それが『主の祈り』の第三の祈願の意味を明らかにする(6:10)」⁸。

われわれもマタイにおける天と地の呼応関係という視点が存在することを想定するが、しかしその論証のためにはテキストの詳細な分析が必要である。つまり、このモチーフがマタイ福音書全体の中でどれくらい意図的に用いられているかを検証しなければならない。その上で、もしもマタイにそのようなストラテジーが認められるとすれば、「神の国」が「天の国」へ意図的に置き換えられたとする想定の裏付けを得られることになる。

そこで、今回はわれわれの考察対象である 6:10bc に見出される天と地の関係を伝承史の視点から検証するために、旧約聖書の表現を手がかりにしたい。そうすることによって、マタイの表現が旧約的な表現の継承に過ぎないのか、あるいはそこにマタイ独自の思想の反映が確認できるかどうかが明らかになるであろう。

2.2. マタイ 6:10bc の伝承史的考察

① マタイ 6:10b について

U. ルツによれば γεννηθῆτω τὸ θέλημα σου (あなたの御心になるように) との祈願がユダヤ教に並行している例はないという⁹。しかしながら、**神の意志を實踐しようとする信仰者の言葉**であるなら詩編に見出すことができる。

たとえば詩 40:9 には「あなたの意思を行なうことを、わが神よ、私は悦びます (לְעֲשׂוֹת רְצוֹנֶךָ אֱלֹהֵי חַפְצֹתַי)」¹⁰ という表現がある。この節の LXX (39:9) においては、神の意思を「行なうこと (τοῦ ποιῆσαι)」に強調点が置かれているため、神の意思の実現を祈願するマタイ 6:10b の表現とは異なっている。さらに 143:10 の「私に教えて下さい、あなたの意思を行なうことを (לְמַדְנִי לְעֲשׂוֹת רְצוֹנֶךָ)」¹¹ という文言の LXX (142:10) においても「行なうこと (τοῦ ποιεῖν)」が祈願者の主要な関心事となっている。

それゆえ、これらの詩編のテキストの表現とマタイ 6:10b には相違が認められる

8 小河陽『マタイによる福音書 旧約の完成者イエス』日本基督教団出版局、1996年、306頁。

9 ルツ、前掲書、492頁参照。しかし、エリエゼルの祈り *b. Ber.* 29b が近い文言として紹介されている(808頁、尾注74)。また、J. Nolland (*The Gospel of Matthew: A Commentary on the Greek Text*, Grand Rapids, Mich.: W. B. Eerdmans, 2005, p. 288) は *m.* 'Abot 2:4; *b. Ber.* 17a; *I Macc.* 3:60 を掲げている。他方、シュトレッカー(前掲書、220頁)は「ラビ文献にこれに対応するものが見当たらない……」としている。

10 『旧約聖書 XI 詩篇』(旧約聖書翻訳委員会訳) 1998年、108頁より引用。

11 同上、402頁より引用。

と言ってよい。しかしマタイに「天におられる私の父の意思を行なう者 (ὁ ποιῶν τὸ θέλημα τοῦ πατρὸς μου τοῦ ἐν τοῖς οὐρανοῖς)」が天の王国に入る (7:21 参照) という表現があり、マタイ全体においても信仰者の行為が重視されているのだから、詩 40:9 がマタイの念頭になかったとは言えないであろう。つまりマタイにおいて、神の意思を神自身が行為するのか、あるいは人間が実践するべきかという対立の問題があるとは思われぬのである。いずれにせよ表現のレベルに限って言えば、6:10b がマタイ独自のものであるのは間違いない。

② マタイ 6:10c について

この箇所における天と地への言及は重要である。果たしてマタイは、この表現を独自の発想に基づいて創作したのだろうか、あるいは基になる伝承が存在するのだろうか。この問題について、旧約聖書のテキストとの比較検討を通して考察したい。

まず基本的な事柄として、旧約聖書における天と地は「組み合わせ」の形で表現されることが多いという事実を指摘したい。この組み合わせをどう数えるかは、その文脈をどの範囲にまで広げて考慮するかによるが、J. T. Pennington は、少なくとも 185 回にわたって使用されていると報告している¹²。この数値から明白であるように、天と地の組み合わせは旧約伝承のモチーフに由来するものであり、マタイがその影響を受けていることは無理なく想定できる。

ただし、この「組み合わせ」に関する表現形式の傾向については、さらに踏み込んだ見方が必要である。なぜなら天と地の組み合わせが並置されている場合と、対置されている場合の二つの傾向が確認できるからである。前者に関する代表的なテキストは以下の通りである¹³。

はじめに神は天と地を創造した¹⁴。(創 1:1)

……、天地の造り主、いと高き神に ……¹⁵。(創 14:22)

わたしはまた、あなたたちの天を鉄のように変え、あなたたちの地を銅のように変えるであろう¹⁶。(レビ 26:19)

今日私は、あなたたちに天と地を証人として証しする。……¹⁷ (申 4:26)

喜べ、天は、歡喜せよ、地は ……¹⁸。(代上 16:31)

12 Cf. J. T. Pennington, *Heaven and Earth in the Gospel of Matthew*, Leiden: Brill, 2007, p. 163.

13 Cf. *ibid.*, p. 167.

14 『旧約聖書 I 創世記』(旧約聖書翻訳委員会訳) 1997 年、3 頁より引用。

15 『聖書 新共同訳』(共同訳聖書実行委員会訳) 1987 年、18 頁より引用。

16 『旧約聖書 II 出エジプト記 レビ記』(旧約聖書翻訳委員会訳) 2000 年、379 頁より引用。

17 『旧約聖書 III 民数記 申命記』(旧約聖書翻訳委員会訳) 2001 年、265 頁より引用。

18 『旧約聖書 XV 歴代誌』(旧約聖書翻訳委員会訳) 2001 年、133 頁より引用。

他方、天と地が対置されている代表的なテキストは下記の通りである¹⁹。

天は、ヤハウェのための天、地は、かれがひとの子らに与えた²⁰。(詩 115:16)

まことに、ヤハウェはおのが聖なる高みから見下ろした、天から地をかれは眺めた、²¹..... (詩 102:20)

神の前では、言葉を出そうとして、慌てて口を開いたり、心を焦らせたりするな。

なぜなら、神は天におり、あなたは地上にいるのだから²²。(コヘ 5:1)

ヤハウェは、こう言われる、「天はわが王座、地はわが足の台座。.....」(イザ 66:1)²³

これらの例が示すように、旧約聖書には天と地が一体のものとして言及されているテキストと、天と地の断絶を強く意識したテキストが存在している。とはいえ、天と地の組み合わせが旧約伝承の中で重要な主題となっているのは間違いない。

③ マタイ 6:10bc について

これまで 6:10b と 10c を個別に取り扱ったが、10bc 全体に直接影響を与えたと見られるテキストは存在するのだろうか。これについて C. A. Evans は、関係する並行箇所として詩 135:6 を示している²⁴。テキストは以下の通りである。

すべてヤハウェが悦ぶことをかれは行なう、天と地で、.....²⁵

כָּל אֲשֶׁר־הִפְּיץ יְהוָה עֲשָׂה בְּשָׁמַיִם וּבָאָרֶץ

πάντα ὅσα ἠθέλησεν ὁ κύριος ἐποίησεν ἐν τῷ οὐρανῷ καὶ ἐν τῇ γῆ (LXX=134:6)

この文言は 6:10bc と類似しているが、内容的に著しい相違があることに留意しなければならない。まず神の意思を行なうことに関する前半部分について、マタイの場合は祈願文であるという点に大きな特徴がある。詩 135:6 は、そうではなく神自身の行為として言及されている。さらに後半部分については、天と地が一体のものとして

19 Cf. Pennington, *op. cit.*, p. 168.

20 『旧約聖書 XI 詩篇』、329 頁より引用。

21 同上、283 頁より引用。

22 『旧約聖書 XIII ルツ記 雅歌 コーヘレト書 哀歌 エステル記』(旧約聖書翻訳委員会訳) 1998 年、75 頁より引用。

23 『旧約聖書 VII イザヤ書』(旧約聖書翻訳委員会訳) 1997 年、307 頁より引用。

24 C. A. Evans (*Matthew*, Cambridge: Cambridge University Press, 2012, p. 147) は詩 135:6 と共に、*t. Ber.* 3:11 も類似した箇所として提示している。

25 『旧約聖書 XI 詩篇』、381 頁より引用。

想定されている詩 135:6 と異なり、マタイでは天と地の隔絶が前提とされている。その上でマタイは、天と地が神の意思によって一致するように祈願しているのである²⁶。つまり、詩 135:6 とマタイ 6:10bc は表現が類似しているものの、思想的には直接的な関係がないと言える。

以上の考察から、第三祈願文であるマタイ 6:10bc は、その独自性が顕著であることがわかる。しかも、その思想は「天と地をつなぐ」ことを強調するマタイの傾向(16:19, 18:18-19, 28:18) と密接に関係しているため、これを独自の編集意図に基づく挿入句であると判断することができる。

3. 結語

研究史において確認したように「天の王国」と「神の王国」に神学的な意味の相違を認めることはできない。これら二つの表現は、入れ替え可能な同義語なのである。

それなら、なぜマタイは「天の王国」という表現を用いたのだろうか。定説では、マタイがユダヤ教の伝統に基づいて神名の使用に畏怖の念を抱いたからであるとされている。しかしそうであるとすれば「神の王国」がマタイ福音書の中で4か所用いられているのは、なぜなのだろうか。マタイが犯した編集上の不注意にしては数が多い。畏怖の念が理由であれば、なおさらである。

そこでわれわれは神名を避けるためではなく、むしろ「天の」という文言を用いる必然性があった可能性を考慮した上で、マタイ 6:10bc の編集意図を考察した。

その結果、マタイは「天の王国」という表現を用いることにより、天と地の断絶を神の意思によって統一させようとするマタイの神学思想的な背景があるとする結論が得られた。この仮説が正しければ、「天の王国」という表現はマタイのイメージ戦略である²⁷と見なすことができる。とはいえ、今回の考察結果を最終的な判断とすることはできない。他の重要箇所に関しても考察を行う必要があるので、それを今後の課題としたい。

26 おそらく、天と隔絶している地に神の意思が実現するというモチーフは、マタイが強調する「天の王国」の告知(3:2, 4:17)と密接に関係していると思われる。そうであれば天の王国の接近は、単に神の支配領域の拡大にとどまらず、神の意思の実現という実質的な意味を帯びていると考えられる。

27 Cf. Margaret Hannan, *The Nature and Demands of the Sovereign Rule of God in the Gospel of Matthew*, London: T&T Clark, 2006, p. 192.

《資料》マタイにおける「天の王国／神の王国」の使用箇所と編集傾向の分析

		編集の詳細	
マタイ	テーマ・文脈	資料	
3:2	ヨハネの宣教開始	Mk.1:4	マルコと異なり、マタイの描くバプテスマのヨハネは「天の王国の接近」を告知している。
4:17	イエスの福音宣教	Mk.1:15	マタイはマルコの「神の王国」を「天の王国」に修正している。また上記との関連で、マタイのイエスはヨハネによる「天の王国の接近」の告知を継承する者として描かれている。
4:23	イエスの福音宣教	Mk.1:39	マタイはマルコを修正し「その王国の (τῆς βασιλείας) 福音」の宣教であることを明確にしている。
5:3	イエスの説教	Q (Lk.6:20b)	マタイはQの「神の王国」を「天の王国」に修正している。マタイはこの言葉を上上の説教に位置付けている。
5:10	イエスの説教	Q+マタイ	マタイの創作の可能性あり。
5:19-20	律法と預言者について	Q+マタイ	マタイの創作の可能性あり。律法を行う者の「天の王国」における立場についての言及が附加されたものと見られる。
6:10bc	主の祈り	Q (Lk.11:2)	「あなたの (神の) 王国」の到来を祈願するQの言葉を踏襲。ただしマタイは続けて「あなたの (神の) 意志が、天におけるように地の上でも (ὡς ἐν οὐρανῷ καὶ ἐπὶ γῆς) なされるように」との祈願文を附加している。
6:33	(神の) 国を求めよ	Q (Lk.12:31)	写本の証言が弱いため、マタイのテキストに「神の」があったかどうかどうは疑わしい。いずれにせよ、意味するところは変わらない。また、Qにはなかった「神の義」が附加されている。
7:21	「主よ、主よ」と言う者について	Q (Lk.6:46)	元資料はQであるが、ルカの場合はイエスの言葉を行うことに関する言及となっており、一方でマタイは神の意志を行う者に関する言及となっている。その際、マタイが「天の王国」に入る資格に関する内容を附加したと見られる。
8:11	異邦人が天の王国の宴会に迎えられる	Q (Lk.13:29)	ルカは狭い戸口から入らない者が締め出されると語る譬えとの関連で、神の王国の宴会に迎えられる人々について言及している。一方でマタイは、このモテイーフを巨人隊長の信仰と関連させている。
9:35	イエスの福音宣教	Mk.6:6b	4:23と同様の編集方針。
10:7	十二弟子の派遣	マタイ+Mk.6:7-13	ルカはマルコのモテイーフに「神の王国」の宣教を関連づけているが、マタイは「天の王国の接近」の告知を具体的に指示する言葉を附加している。
11:11-12	ヨハネよりも偉大な者と天の王国の強奪者	Q (Lk.7:28; 16:16)	元来は「神の王国」と記されていたものを、マタイが「天の王国」に修正したと見られる (ルカはQを踏襲)。
12:28	悪霊追い出しと神の王国の到来	Q (Lk.11:20)	マタイはQの「神の王国」の文言を修正していない。
13:11	譬え話を用いる意義に関する説明	Mk.4:11	マタイはマルコを修正。「天の王国」を譬え話で説明する意義について、マルコは弟子たちの周りにいる人々に向けても語っているが、マタイのイエスは弟子たちだけに語っている。
13:19	種を蒔く人の譬えの解釈	Mk.4:14	マタイは、マルコの「その言葉」を「その王国の言葉」を「その王国の言葉 (τὸν λόγον τῆς βασιλείας)」に修正している。
13:24	譬え話 (毒妻)	特殊資料	元来の資料は「神の王国」であった可能性がある。
13:33	譬え話 (パン種)	Q (Lk.13:20)	マタイはQの「神の王国」を「天の王国」に修正したと見られる。
13:38	譬え話 (毒妻の譬え話の解釈)	特殊資料	「その王国の子どもたち (οἱ υἱοὶ τῆς βασιλείας)」という表現が用いられている。

13:41	譬え話 (蕎麦の譬え話の解釈)	特殊資料	「彼 (イエス) の王国から (ἐκ τῆς βασιλείας αὐτοῦ)」という表現が用いられている。
13:43	譬え話 (蕎麦の譬え話の解釈)	特殊資料	「彼らの父の国で (ἐν τῇ βασιλείᾳ τοῦ πατρὸς αὐτῶν)」という表現が用いられている。
13:44	譬え話 (畑に隠された宝)	特殊資料	元来の資料は「神の王国」であった可能性がある。
13:45	譬え話 (真珠を捜す商人)	特殊資料	元来の資料は「神の王国」であった可能性がある。
13:47	譬え話 (網に捕えられた魚)	特殊資料	元来の資料は「神の王国」であった可能性がある。
13:52	譬え (天の王国を学んだ学者)	特殊資料	元来の資料は「神の王国」であった可能性がある。
16:19	ペトロに対する天の王国の鍵の授与	Mk.8:27-30+マタイ	マタイの創作の可能性あり。
16:28	イエスに従う	Mk.9:1	マタイはマルコの「神の王国が力にあふれて現れるのを見るまでは」を「人の子が自分の国に (ἐν τῇ βασιλείᾳ αὐτοῦ) 来るのを見るまでは」に修正している。
18:1	天の王国で一番偉い者	Mk.9:33-37+マタイ	物語の主旨はマルコと同じだが、偉さを競う弟子たちの議論を「天の王国」での偉さ比べに修正している。
18:3-4	天の王国と子ども	Mk.9:33-37+マタイ	上記に引き続き、マタイはマルコの伝承を踏襲しつつ「天の王国」では子どもが最も偉いとの見解を挿入している。
18:23	譬え話 (赦さない家来)	特殊資料	元来の資料は「神の王国」であった可能性がある。
19:12	離縁と独身に関する言及	Mk.10:2-12+マタイ	マルコのテキストに依拠しつつ、マタイが創作した見解を付加したと見られる。
19:14	天の王国と子ども	Mk.10:14	マタイはマルコの「神の王国」を「天の王国」に修正している。
19:23	金持ちと天の王国	Mk.10:23	マタイはマルコの「神の王国」を「天の王国」に修正している。
[19:24]	金持ちと神の王国	Mk.10:25	マタイはマルコの「神の王国」を修正していない。さらにマタイは、マルコ10:24を省いている。
20:1	譬え話 (ぶどう園の労働者)	特殊資料	元来の資料は「神の王国」であった可能性がある。
20:21	ゼベダイの子たちの地位	Mk.10:37	マタイはマルコの「あなたの栄光の中で (ἐν τῇ δόξῃ σου)」を「あなたの王国で (ἐν τῇ βασιλείᾳ σου)」に修正している。
[21:31]	徴税人や娼婦と神の王国	特殊資料	マタイは元来の資料にあった「神の王国」を修正しなかったと見られる。
[21:43]	譬え話 (悪い農夫)	Mk.12:1-12+マタイ	マルコのテキストに依拠しつつ、マタイが創作した見解を付加したと見られる。ただし「天の王国」という表現を好むマタイが、なぜ「神の王国」という表現を用いたのか疑問が残される。
22:2	譬え話 (婚宴への招き)	Q (Lk.14:15)	マタイはQの「神の王国」を「天の王国」に修正したと見られる。
23:13	律法学者への批判	Q (Lk.11:52)	マタイはQに「天の王国を閉ざす」ことに関する文言を付加したと見られる。
24:14	小黙示録	Mk.13:9-13+マタイ	マタイは、終末に「その王国の福音 (τὸ εὐαγγέλιον τῆς βασιλείας)」が全世界に宣べ伝えられるとの言及を付加している。
25:1	譬え話 (十人のおとめ)	特殊資料	元来の資料は「神の王国」であった可能性がある。
25:14	譬え話 (タラント)	Q (Lk.19:12)	ここで、直接的に「天の王国」という表現が使用されているわけではない。直前の譬え話との関連における文脈上の判断。
25:34	譬え話 (最後の審判)	特殊資料	「王国」を受け継ぐ人々に関する言及が見られる。

※聖書箇所□の囲いは「神の王国」、下線は「王国」に関する他の表現が使われていることを示している。無印は「天の王国」。

【Abstract】

A Redaction-Critical Study of Matt. 6:10bc

— A Consideration of the Concept of "Kingdom of Heaven" in Matthew —

KIHARA Keiji

Matthew prefers to use the expression ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν (the kingdom of heaven) in place of ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ (the kingdom of God). The purpose of this paper is to examine the reason why he uses this expression.

Several studies have proved that there is no difference in meaning between "the kingdom of God" and "the kingdom of heaven." However, it is possible that Matthew intentionally uses these two expressions separately because he connects heaven and earth in a unique way (16:19; 18: 18-19; 28:18). Therefore, whether "the kingdom of heaven" is an important theological concept for Matthew must be discussed.

Here we focus attention on Matthew 6:10bc, which is part of the third prayer of the Lord's Prayer. The reason for it is highly probable that Matthew adds this sentence, and he associates ἡ βασιλεία σου ("your kingdom" means the kingdom of God) with heaven and earth. Matthew 6:9b-13 is parallel to the Lord's Prayer in Luke 11:2c-4 (Q), the latter lacks the phrases "Our. . . in heaven" (Matt 6:9b) and "Your will be done, on earth as it is in heaven" (10bc).

In addition to this, 6:10b corresponds to Matt 26:42 (Jesus's prayer in Gethsemane), and 6:10c is similar to 16:19; 18:18, which depict the connection between heaven and earth. The same expression is not found in Jewish literature, but Psalms 40:9 (LXX=39:9) and 143:10 (LXX=142:10) show the practice of God's will. Since it is Matthew's main concern (Matt 7:21), the expression of 6:10b can be said to be his creative idea.

On the other hand, 6:10c reflects the idea of the Old Testament that shows the relationship between heaven and earth (e.g., Gen1:1; 14:22; Lev 26:19; Deut 4:26; 1 Chron 16:31; Ps 115:16; 102:20; Eccles 5:1; Isa 66:1). The whole idea of 6:10bc, which shows praying for the realization of God's will in heaven and earth, is close to Psalm 135:6. However, unlike Matthew, Psalm 135: 6 is not a prayer, and it does not assume the disconnection between heaven and earth.

From the above-mentioned discussions, it is clear that 6:10bc shows Matthew's unique thought about heaven and earth. In future studies, we will consider other parts of the "Kingdom of Heaven" in Matthew with this in mind.